

都道府県別賞一等

明日へのお守り

長崎県 諫早市立明峰中学校 三学年

伊藤 陸翔

去年の八月、僕の祖父は家族に見守られながら静かに息を引き取った。医師からそのことを告げられたとき、僕はすぐに理解できず、ただ朦朧としていた。周りを見渡すと、普段は明るい祖母はとても悲しそうな顔をしており、普段は涙を見せない父も今にも泣きそうな表情で祖父を見ていた。その姿を目にして、祖父は本当にこの世を去ってしまったのだと実感した。少し前までは当たり前前に会って、楽しく言葉を交わしていた祖父と、もう二度と話せないと思ったとき、僕の目にも自然に涙が込み上げてきた。

僕の祖父は何カ月も前から入退院を繰り返しており、その間は面会も許されていなかった。しかし数カ月後、祖父が危篤状態だと知らされ、ようやく会えることになった。僕は心配と同時に「やっと会える」という喜びも胸に抱き、病室に向かった。ところが、そこで目にしたのは変わり果てた祖父の姿だった。意識はほとんどなく、手足も細くなっていた。そのとき僕は『行けるときは必ずお見舞いに行こう』と心に誓い、それからはほとんど毎日お見舞いに通った。数日後、僕たちはお見舞いを終えて家に帰っていた。すると電話の着信音が響いた。父がスマホを取ると、祖母は震える声で「おじいちゃんが心停止したの。」と言った。僕たちは急いで病院に戻ったが、到着した頃にはすでに呼吸は無かった。こうして、祖父は天国へと旅立っていった。その後は葬儀や通夜など慌ただしい日々が続いた。

気持ちさが少しずつ整理されはじめた頃、僕は父に

「おばあちゃんは今まで通りに暮らしていけるの。」

と尋ねた。すると、父は

「おじいちゃんが生命保険に入っていたから、ある程度の生活は支えられるよ。」と答えた。その話を聞いたとき、僕の心に一つの景色が浮かんできた。祖父母が仲良く笑い合い、助け合っている姿だ。亡くなった今も祖父は祖母のことを支え続けていると感じた。僕や祖母をはじめ、多くの人が祖父を大切に思っていたし、祖父もまた、僕たちを大切にしてくれていた。その思いを象徴するものの一つが生命保険である。そこから僕が「どんな人にも必ずつながりがあり、誰かに大切に思われ、誰かを大切にしている」ということに気づいた。そして、そのために生命保険は役立つと感じた。

現在の日本は「超高齢社会」と呼ばれている。六十五歳以上の高齢者のうち、

第63回中学生作文コンクール

一人暮らしの割合は全体の約三割となり、介護を必要とする人も増え続けている。そのため、これまで以上に家族や周囲のサポート、そして経済的な支えが重要になってくる。こうした状況で、負担を少しでも軽くできる生命保険が必要不可欠な存在だと思う。

いつ、何が起こるかは誰にも分からない。明日、大地震が起きるかもしれないし、人生を一変させるような事故や病気に見舞われるかもしれない。あるいは突然、家族の介護を担わなければならない日が来るかもしれない。だからこそ、生命保険に加入するという行動は、自分を大切に思ってくれている人や自分が思う人を守ることにつながるのだ。

生命保険は僕たち一人一人を守ってくれる、「お守り」のようなものだ。その存在を知り、活用していくことが、より良い明日をつくるための第一歩になる。未来は予測できないけれど、自分の明日を形づくる土台は築くことができる。今日の行動こそが明日をつくる一片になるのだ。生命保険というお守りを手に、未来をより良く変えていきたい。